

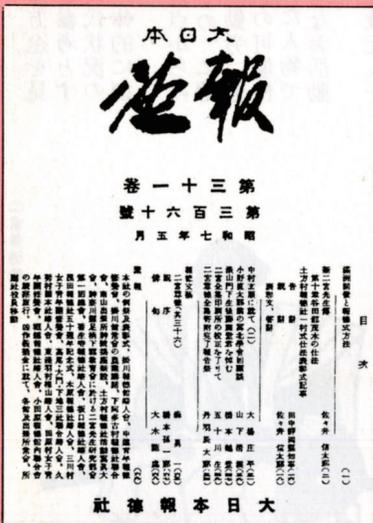
近代日本に多大な影響を与えた報徳思想
 と報徳運動の歩みを克明に記録した唯一
 最大の機関誌。一宮尊徳の報徳思想、日
 本報徳運動史を知る根本史料。今、その
 貴重な先人達の足跡を後世に残す。

日本報徳運動雑誌集成

全47巻 別巻1

全巻完結!!

大日本帝国報徳 第1巻～第5巻
 大日本報徳学友会報 第6巻～第21巻
 報徳の友 第22巻～第26巻
 大日本報徳 第27巻～第46巻
 勸農俚謳集 第47巻



綠蔭書房

展過程における日本の農村、 遷を辿る上で極めて貴重な資料。

『日本報徳運動雑誌集成』復刻にあたって

二十一世紀を前にして、我が国は政治、経済、外交、教育、福祉等、様々な分野で新たな方途を見出すべく試行錯誤している。こうした問題に対処するには、或いは諸外国の理論・実践を参考とする中、できるだけ解決方法の中にあるものかもしントは、我が国の先人達の知恵や彼らが様々な時代状況の中で行ってきた解決方法の中にあるものかもしなければならない。こうした文化遺産に学び、内発的・主体的に創造的な文化を築いていくことが、今こそ求められているといえよう。

二宮尊徳の報徳思想は、単なる復古趣味のレペルからではなく、現代にもいかすという観点から、とても多くの示唆を含んでいる。経済大國日本が忘れてきた「道徳と経済の調和」、全ての「もの」に徳という名の価値を付与する発想、もの・人を大切にすることを教えている「至誠」の説教、「勤労二分度」「推譲」等多くの実践倫理、「推譲」を契機とした地域課題の解決や福祉の実践や世界平和の可能性、等数多くの示唆を与えるものである。尊徳は、思想もさることながら実践家としても優れた人物であった。尊徳が、実践の為に考案した報徳社は、近代以降も遠州地方等で発達して、現在もお活動を続けている。それが、掛川市にある「大日本報徳社」と全国に広がるその支社である。

弘化三（一八四六）年、尊徳の風呂焚きをしていたと言われる安居院庄七（別名義道、寛政元（一七八九）年、文久三（一八六三）年）によって遠州地方に伝導された報徳の教説を基にして、岡田佐平治らの「報徳連中」が、幕末に報徳社を結成して農村復興を図った。その報徳社運動の基礎のうえに、各村々の報徳社を統一する本社として「遠江国報徳社」が設立（明治八年一月）された。「遠江国報徳社」は、佐平治の息子であり、尊徳のいわゆる「四高弟」の一人であり、文部大臣岡田良平・内務大臣一木喜徳郎等の父親でもある岡田良一郎が二代目社長（明治九年四月）を務め、近代の遠州地方の報徳社運動は大きく華開いていく。「遠江国報徳社」は明治四一年一月から「大日本報徳社」と改称し、「大日本報徳社」は大正一三年四月に全国の報徳社の大合同を行うが、こうした時期を通して彼は明治四五年一月まで社長として報徳社を指揮し続ける。その後、岡田良平社長、佐々井信太郎副社長、一木喜徳郎社長等の指導者を抱えて現在に至っている。

さて、この『日本報徳運動雑誌集成』（全47巻）は、「遠江国報徳社」から現「大日本報徳社」と続く報徳社が、現在に至るまで発行し続けてきた機関誌『大日本帝國報徳』（明治二五年三年創刊）、『大日本報徳学友会報』、『報徳の友』、『大日本報徳』等のうち昭和二〇年一月までのものと、「掛川農学社（舎）」が、明治一六年七月より同二一年五月に発行した機関紙『勸農俚語集』を復刊するものである。

今回の復刊の最大の意義は、近代日本における地方の農村の基底部で、報徳社運動に関わった多くの人々が何を考え、何を問題として捉え、どのような行動をとって問題を解決しようとしたのかを知る。そのことは、また同時に、変転してきた時代・社会を農村から照射することでもあり、ことのできる基礎的な資料が一般に明らかにされるという点にある。

近代の報徳運動を知る為の資料は、何も報徳社の機関誌だけではない。報徳社の機関誌も含めて印刷された文献を大雑把に並べれば、①二宮尊徳のいわゆる「四高弟」と言われている富田高慶、斎藤高行、福住正兄、岡田良一郎が尊徳没後からそれほど時代が下っていない頃に尊徳から教えられたことを基に記述したもの、②「遠江国報徳社」「大日本報徳社」「掛川農学社（舎）」が出版した上述の機関誌と多くの著書、③日露戦争後の明治後半期に内務省官僚等が組織した「報徳会（大正元年から「中央報徳会」と改称）が出版した機関誌「斯民」と多くの著書、④佐々井信太郎等の尽力でようやく昭和二年から世に出された「二宮尊徳全集」、⑤佐々井信太郎が昭和二七年九月に創刊し、現在も刊行されている『おがびやく』などが挙げられよう。ここで、特に明記しておきたいのは、②に掲げた「遠江国報徳社」「大日本報徳社」「掛川農学社（舎）」と、③に掲げた「報徳会（中央報徳会）」は、もとより別個の組織であったということである。したがって、報徳社運動と報徳会運動、そしてそれらを含む報徳運動の三者の関係が整理されなければならないと思われる。こうした文献等のいくつかが使用されて、報徳社に關しての多くの研究がなされてきた。しかし、

二宮尊徳像



安居院庄七（義道）



岡田佐平治（初代社長） 在任明8・11～明8・12
……遠江国報徳社を設立、近代報徳運動の創始者



日本の資本主義勃興期から形成・発展 農家の変容や近代世相の変遷

ここに大きく二つの問題点があったように思われる。

まず、第一点は、一部の文献だけで研究が行われてきたことである。③のうちの『斯民』と④の『二宮尊徳全集』は既に復刊されており、図書館等を通して比較的私たちの目に触れやすかった。しかし、今回復刊の②の機関誌は、ほとんど人目に触れずに眠ってきたものである。報徳社の機関誌を所蔵している大学、研究機関がほとんどなかったことが、その大きな要因であろう。このことにより、報徳社や報徳を信奉した人々が、実際に地域で何をやっていったのかを実証的に調べずに研究がなされてしまいうことが往々にしてあった。中には、『斯民』のほんの一部を使用して、報徳社にまで言及しているものもあった。それがやっとな、関係筋の要望を待たせたくえで復刊の運びとなり、新たな研究の局面が迎えられることとなった。今後、報徳社運動に対する通説を裏づけたり、或いは覆すに足る貴重な資料となるであろう。

第二点は、報徳社運動の研究が、それぞれの研究者が属する学問分野や、研究者の拠って立つところの理論（や理論的枠組や図式）や、研究者個人の視点から行われてきたことである。このことは、大なり小なり避けられないことではある。しかし、問題は分析しかならないのに報徳社運動全体の性格づけをしてしまったり、今回復刊の機関誌等を使用して追調査することなしに、後の研究者がその性格づけを信頼してしまったりしていることである。しかし、特定の学問分野、何らかの理論、何らかの視点を背景にもって報徳社運動を捉えようとした研究が、未だその本質を言い当てていないのが現状ではないだろうか。

本集をひとたび開いてみれば、様々な観点からの興味が尽きなくなるだろう。近代における中央と地方の問題、国家政策と民間との関係、日本のアイデンティティ、日本人の行動特性、農山漁村の庶民の生活、甲種農学校・系統農会・補習学校・信用組合等がなかった頃にそれらの機能を先駆的に果たした報徳社の可能性と限界、経済的・道徳的危機に陥った時に一思想に頼ることの可能性と限界、等々……簡単ににはつかみきれない数多くの命題を解きあかす際に、本集は必ずや手がかりとなってくれらるだろう。

かつて、社会事業家で報徳社の実地調査をして報徳研究も行った留岡幸助は、すでに明治後半期に尊徳に関して、「未だ頭はれざる美点の多き」こと、「尚ほ学ぶべき高所の数多き」ことを指摘した（留岡幸助「二宮尊徳と其風化」警醒社書店、明治四一年一月）。まさに、数多くの報徳社の人々が、尊徳を尊敬し現在に至るまで追求し続けているものは、この「未だ頭はれざる美点」であり、「学ぶべき高所」である。これが簡単につかめないからこそ、現在も報徳社は続いており、報徳信奉者が絶えないのである。

今回の復刊を契機に、報徳社運動、報徳会運動、報徳運動に対する総合的・客観的な研究の必要性の認識が起り、関係諸科学の分野の研究者によって真に学際的な研究に発展することを願ってやまない。また、研究者のみならず、報徳実践者、報徳に少しでも興味のある方々に、この『日本報徳運動雑誌集成』は、多くの示唆、問題解決の糸口を与え、実践、研究を深める好材料となるであろう。是非、多くの図書館、関係研究機関で揃えていただきたいものである。



佐々井信太郎
……『二宮尊徳全集』編纂・刊行、農村経済更生仕
法推進など、報徳運動史上の画期をなす



福住正児
……『宮門四大人の一人』、『富翁夜話』の著者



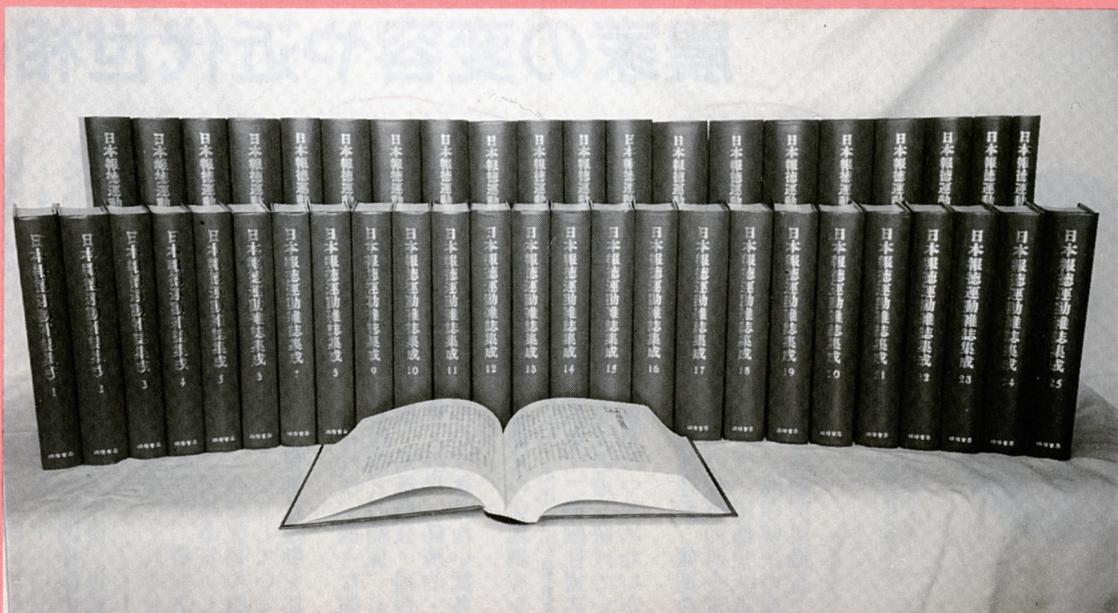
斉藤高行
……『宮門四大人の一人』、『二宮先生語録』の著者、
富田高慶の甥



富田高慶
……『宮門四大人の一人』、『報徳記』は代表作、
尊徳の長女文子と結婚した



岡田良一郎（淡山）二代社長 在任明9・4〜明45・1
……佐平治を継ぎ、東北学舎、掛川農学校などを
創立、報徳運動の基盤を確立



二宮尊徳の報徳思想、日本報徳運動史を知る根本資料。また近代日本の農村(運動)史、農業(技術)史、思想史、社会教育史、社会事業史、風俗・世相史研究等の資料の宝庫である。

日本報徳運動雑誌集成

全47巻・別巻1

収録雑誌

大日本帝国報徳[明治25・3～明治36・9] 全5巻

大日本報徳学会報[明治37・1～大正8・12] 全16巻

報徳の友[大正9・1～大正13・12] 全5巻

大日本報徳[大正14・1～昭和20・12] 全20巻

勸農俚謳集[明治16・7～明治21・5] 全1巻

刊行概要

A5判・B5判(47巻のみ)／上製クロス装・函入
総606冊／総約35,000頁

解題「別巻に収録」前田寿紀(淑徳大学助教授)

揃定価940,000円(税別)

ISBN4-89774-104-1 C3330 ¥940000E

◆別巻「解題・記事分類目録・執筆索引」のみ分売いたします
頒布価格20,000円(税別)

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

●お取り扱いは